

全国曹洞宗青年会

SOUSEI

No.158
SOUSEI
2012.08

たくさんの別れを見てきた。
たくさんの絆を見てきた。

特集.. 葬儀に向き合う私たち



巻頭特集

送る心

葬儀に向き合う私たち



ま、葬儀の現場が揺れている。と
しくかくマスクミが、仏教葬儀ばなれ、
いわゆる無宗教葬、直葬などを喧伝する
一方、東日本大震災の被災地では、仏教
葬儀を求める声が多く聞かれ、また、
菩提寺と檀信徒の信頼関係から、避難所
を中心とした共同体が生まれ、葬儀・供
養のみならず、僧侶が様々な役割を担っ
た。この大きな歴史の転換点において、
私たちは何に依拠して、故人を送るべき
だろうか。

一般誌において、葬儀を扱った記事は、
戒名料の問題、墓の後継者不足、葬儀費
用の問題などを取り上げることが多く、
そこにはセンサーシヨナルな見出しが躍
り、「リーズナブルであること」「明朗で
あること」「現代的であること」が、あた
かも葬儀に求められる全てであるかのよ
うだ。そこには何か、本質的な要素が欠
けてはいないだろうか？なぜ、これまで
日本では、仏教葬儀が何百年にも渡って
受け継がれてきたのか？求められてきた
のだろうか？

その核心を、故人を送る私たち僧侶自
身が問い直すべきではないか？そのよう
な問題意識のもと、現場で日々、葬儀・
供養に奔走する僧侶の想いを問うことを
通して、その根本を再考した。

(取材と文／倉島隆行広報委員長)



先達を訪ねて 道を問う

葬儀について思い巡らせるとき、私の
脳裏に決まって浮かぶ一日がある。あの
日の私は法友の訃報に接し、がむしやら
に長野県へと車を走らせていた。若くし
て遷化した彼への思いで頭が一杯になり、
「信じられない」「何故だ」との問いを繰
り返すばかりだった。寺に到着して本堂
に駆け込み、真っ白な布で覆われた堂内
で彼の写真と対面しても、答えの無い問
いは頭を離れなかった。

やがて本葬の儀が開式され、読経が始
まった。常日頃から別離に接している身
も、近しい者の死には等しく無力である
ことを思い知らされる。そんな折、目の
端で一人の老師が進前し、懇ろに香を焚
かれると、懐中より取り出した紙を掌に
広げられた。そして、ゆっくりと祭壇に
語りかけられた。

「禅友よ、あなたは日々謙虚謙遜に人は高
く己は低く慚恥の服を忘れぬ若き良き仏
でありました……」

老師の話に耳を傾けるうちに、まさに
在りし日の友の顔や声がありと呼び
起こされ、思わず涙が溢れた。自分と同
じ気持ちで彼を惜しむ言葉に触れて、私
はようやく「ありがとうございます」と
と心の裡で念じ、祭壇の彼に手を合わせ
ることが出来たのだった。

様変わりする葬儀の今を考える機会を
得て、私は誰よりもあの日の老師に、も
う一度お会いしたいと思った。青年僧侶
が悩み、日々向き合う問いへの一言を伺
いたいと思った。私が再び長野へと向かっ

たのは、そういう次第からである。

葬儀は人と人の間の心から生まれる

「遠いところをよく訪ねてくれました。しかし、葬儀への心構えをと言われましても、果たして私に何か話せることがありますかどうか」

本堂にて三拝を終え、別室で向き合った塚田光宣老師(67)は、開口一番にそう言われた。同行を願った地元の岡本真宰広報委員からは、「気骨のある人物として知られた方」と聞き及んでいたので、自然と背筋が伸びる。あらためて訪問の遠因となった4年前の葬儀の話を伝えると、塚田老師は「嗚呼、そうでしたか」と、あの日のことをよく覚えておられた。

私はずいぶん伺いたかったことは、あの日の法語についてである。老師が語られた一言一句が、なにより自分の心に響いたことを告げると、師は初めて微笑された。

「私も若い頃は、難しい語句や工夫した言い回しを用いたものですが、こうして年を経るに従って、一般の方にも分かりやすいようにと、現代に通ずる言葉で話すことを心がけるようになりました。法語というのは仏に向けてのもので、必ずしも参列者に理解できなくても良いという考えもあるでしょうが、現在の私は鬼に角そのようにしております」

古刹を守る僧として、多くの仏を見送



る中で、いつしか至られた境地であろう。あの日、自分の心に、師の言葉があれほど響いたのは何故だったかと自問する。あれが難解に仏法を示す法語であったなら、果たして乱れた心は静まったのだろうかとも。あの日、塚田老師が発せられた言葉には、法友の人柄まで知らねば語れぬ温もりがあった。

「学者や知識人がどう言うかは知りませんが、私は葬儀とは理屈や哲学で行うものではなく、人間の感性がさせる行為だと考えております。大切な人が亡くなったから見送るのだという、人の自然な感情が根本です。この辺りの子供たちも死んだ虫や鳥を見つけると、自らの手で埋葬して花を添え、手を合わせて何やらムニャムニャと唱えております。あれも私は立派な葬式だと思っております。今は葬式無用論だとか、戒名無用論などを言う人もいるようですが、この土地でそのような声はついぞ聞きません」

日々の修行にこそ本道がある

人が人を思う気持ちや葬儀の根本であるという師の言葉に大いに頷きながらも、一方で今、葬儀はいらない、もう和尚は来なくて構わないといった声が聞こえつつある事実には我々は戸惑う。特に都市部では葬儀会社を取り仕切る葬祭も増加し、僧侶もさながら花や祭壇と同様に、オプ

シヨンサービスとして扱われているような錯覚さえ覚える。こうした世の中の変化する前に、私のような道半ばの青年僧が、再び人と人の心から生まれる葬儀を取り戻して行くには、如何なる道があるのか。そう師に問うと、その道は日々の真摯な活動の中にしかないとの即答があった。

「当寺でも写経会に法話会、坐禅会などを通じて、常日頃からお檀家さんとは家族のような関係で楽しくやっております。『良い戒名を考えておいてくださいよ』なんて言う方もいるものですから、うちの戒名は高いから、まだまだ今生で頑張りなさいなどと冗談を申して、笑い合う毎日です。これが普段は何の交流も無く、ただ葬式の時だけの付き合いとなると、たちまちそれは葬式仏教となり、我々は葬式和尚となり、檀家も葬式仏教徒ということになり果てます。このような状態では、件の無用論者に届く言葉が見つからぬのも致し方ないでしょう」

話を伺ううちに、庭で作務に励みながら我々を出迎えられた老師の佇まいが思い出された。境内には山野草の如き清楚な花が咲き並び、老師自ら手を尽くされた庭の隅々に、修行を实践する禪寺の清々しさがあった。いままさに聞いた答えの体现を、師と言葉を交わすより前に得ていたことに思い至った次第であった。

心通う葬儀で声無き対論を

「最近読んだ本には、亡くなって人格の消えた物体に、花や高級メロンを供えて拜んでいるのは滑稽だと書いたものがありました。こういう考え方をすることが進歩的なのだと、知識人を自認する人々ほど陥りがちな風潮が見受けられます。まるで葬式という古くさい儀式は、無知な人がやるものでも言いたげな言論が幅を利かせているようで憂えています」

こうした背景には、時代と共に深刻さを増す人間関係の希薄化のみならず、昨今の厳しい経済状況も透けて見える。しかし人が人を見送るといって、人間の発露と言ふべき葬儀の有り様が、合理性や経済性のみで語られる状況を、多くの人が望んでいると考えるのは早計だろう。内心では大切な人を正しく送りたいと誰もが願っているが、それが難しい世の中に私たちはいま生きている。その心苦しい胸の裡に、昨今の無用論がある種の免罪符として広がるのも社会の一面だろう。しかし、少なくとも我々僧侶は、この状況に声無き対論を示さねばならない。私の思いもまさに、普段の生活態度が導師進退に影響するという、塚田師の言葉と重なる。古くから多くの先人によって語り尽くされてきたその戒めの中にしか、失われつつある寺院と社会の縁を結び手がかりは見つかりはしないのだから。

人と人の心が触れ合うところに
本来の葬儀の有り様があるように思っています。



塚田光宣
昭和20年長野県佐久市の寺の三男に生まれる。一般大学に学ぶも仏飯の味忘れられず発心修行。参禅歴、宗門歴、社会歴数多けれど「どうでもいいこと」と語らず。「一日不作、一日不食」と動中の工夫(作務)に明け暮れる。



年月を超えて読み継がれる、古くて新しい葬儀実践の取り組み

『聞いてわかる檀信徒法要回向集』 岩手県曹洞宗青年会

初版から約15年を経た今、静かに広がりを見せている回向集がある。岩手県曹洞宗青年会(以下岩曹青)が平成9年に初版を発行した『聞いてわかる檀信徒法要回向集』だ。その後の改訂で携帯性に適した小サイズに変更し、在庫切れに伴い、昨年の改定第5版を発行したことにより、岩曹青会員のみならず、他県の宗侶からの購入希望が相次いでいる。問候用に数十部まとめて購入するケースもあり、それまでは年間約100～200部で推移していた販売数が、昨年度は約700冊を記録したほどだ。なぜこの回向集が今また脚光を浴びているのか? その要因を探ってみた。

この回向集の淵源をたどると、初版編集委員のメンバーとして監修を担当された高橋哲秋師(東北管区教化センター統監)が、曹洞宗教化研修所(現・曹洞宗総合研究センター教化研修部門)在籍時に、中野東禪師(京都府竜宝寺住職)が作成された回向文の下敷きに至る。その回向文を用いて、平成6年頃から岩曹青内で特別研修を行ううち、6年頃から岩曹青内で特別研修を行ううち、「研修の成果を形に残したい」との会員からの強い要望があり、編纂委員会が組織されて発行に至った。「発行には、いくつか背景がありました。1つ目は、回向文自体を青年宗侶が果たして理解できているだろうかという疑問。2つ目として、確かに曹洞宗の葬儀は如法に行えば、その厳粛さから儀礼として感動を与えられるけれども、檀信徒が葬儀の内容を果たして理解できているだろうかという点です」(高橋師)また当時、仏教離れが言われる中、「仏の教えに触れることのできる機会は何より葬儀の場。その葬儀の場で檀信徒を教化できなくてどうする」という会員諸師の強い問題意識もあり、編纂・刊行のみならず、東北大会の場においてはその回向文の唱え方の披露まで行ったという。

回向の意味を理解する教材として多くの宗侶が活用

こうして誕生した回向集は、現在どのよう
に活用されているのだろうか。岩曹青執行
部会にお邪魔して会員諸師に尋ねてみたこ
ころ、全ての回向文を唱え、実践しているケ
ースは1割に満たなかったものの、一部の回
向文を活用し、また、回向文の一部を改変
して活用しているとの声が聞かれた。一方で、
「どのように唱えて良いかわからない」「文語
体の回向文を持つ厳粛さや、調子の良さが
損なわれる」といった言葉の響きに対する戸

惑いもあるようだ。「そのような意見は聞き
ます。しかしながら、宗侶それぞれが、自
分なりに抑揚をつけるなどして工夫すれば、
これまでの回向の厳粛さを損なわないので
はないか」と高橋師は語る。確かに、回向
集の「はじめ」には「この回向集を用い
るにあたっては、使用される方がそれぞれ
に工夫し、自分のやり方に合うよう善用し
ていただきたいと思えます」との一文があ
り、また、その場で高橋師に実践していた
だいた回向文の唱え方には、口語体とは思
えない荘厳さが感じられたが……。さらには、
「これまで用いてきた回向文を変えることに
対する戸惑いの声」もあるようだ。中には、
「わかりすぎてもありがたくない」「そもそも、
師匠から教わっていない」といった声もあり、
受け止め方は様々だ。しかしながら、初版
発行当時は、「むしろ老僧方から、『よくぞ回
向文をわかりやすく解説してくれた』と歓
迎の声があった」(高橋師)という経緯もあり、
「わかりやすく変えるべき」と「変えること
には抵抗がある」といった狭間で揺れてい
る宗侶の姿が浮き彫りとなった。

葬儀の命である「血脈授与」

「この血脈は釈迦牟尼仏より28世中国に伝
えし菩提達磨、51世日本に伝えし大本山永
平寺開山道元禪師、54世世に広めし大本山
總持寺開山瑩山禪師、○○世(○○寺○○代)
○○○大和尚を経て我にいたれり。我いま、
新帰元(戒名)に授く。汝その身、そのま
まがみ仏の弟子と心得て、血脈を頂戴護持
し奉るべし」。

これは、曹洞宗の葬儀の中心をなす、血
脈授与の一節だ。従来の回向文と比較すると、
平易かつ詳細に、血脈が伝わってきた道筋
がわかるのではないか。高橋師も、この回

向集においては、血脈授与に力点を置いて
欲しいと言う。実際、岩手の沿岸部のある
お檀家さんから、「今まで和尚さんが唱えて
きたのは、こういう意味だったのか」との
感想が寄せられた。「葬儀の戒師である住職
は、血脈授与(没後作僧)により亡き人を自
分の弟子としたのであるから、埋葬場所や
その後の供養執行などの責任を持つという
自覚につながるのでは」と高橋師は話す。

回向集を自己研鑽のきっかけに

「この回向集全てを活用している例はまだ
少ないかもしれませんが、目を通すことに
より、回向の意味合いを理解することにも
つながりますし、法話などの布教教化の場
でもその要素を伝えられたら良いのでは」。
岩曹青会長・清水昌俊師はこう話す。また、
回向集の裏面には、可漏拝表用語集や塔婆
に記入する語句などがまとめられていて、実
践に役立つ内容となっているため、その点
でもこの回向集は多方面で活躍しそうだ。

先の震災を通して葬儀の重要性に関心が
集まっている。「葬儀は儀礼を通して、大切
な方が亡くなったことを残された方が認識
し、安心を得る大切な場。葬儀離れを防ぐ
ためには、ある程度のわかりやすさは必要。
でも、最も大切なのは、威儀・作法・進退
も含め、私たち僧侶の真剣さ、努力…」とは、
とある岩曹青会員の言。葬儀に関わる私た
ち青年宗侶の「真剣さや覚悟」が一層求め
られている。「葬儀を執行する上で大切な
は、わかりやすさのみならず、何より真剣さ。
葬儀も含め檀務に取り組んでほしい。その一
助にこの回向集がなれば」と高橋師。私た
ち青年宗侶が進むべき道の「一つの道しるべ」
になる可能性を、この回向集は秘めている
ように思えてならない。

曹洞宗葬儀の在り方 — まとめて代えて —

曹洞宗宗務庁教化部長 釜田隆文老師

本来仏教とは生活宗教であります。曹洞宗の教えの根本は、日常生活における信仰にあります。人生を豊かにして生き甲斐のあるものにするためのものです。人間性を高め命の重要さを身につけ家族の幸せ、子ども達の豊かな人生のため、檀信徒に曹洞宗の信仰を求めているだけ、その手助けをするのが宗侶のつとめなのです。バブル崩壊後、経済格差や長期の不況によって、国民間の厭世間はますます募るばかりで、これに呼応するが如く戒名料や、葬儀料への疑心が勃興していったと考えられます。

曹洞宗の葬儀はお釈迦様の戒法を受けて仏に成る（授戒式）ということ。つまり仏教徒として受けるべき「仏戒」を死去に際して授け、仏弟子とした上で臨むのです。本来葬儀とは亡き人の尊厳を守りその冥福を祈り、自らの喪失感を癒す営みとして生まれてきたものであります。今の「家族葬」とか「直葬」などの考え方の一つには、華美な葬儀をして迷惑をかけてはいけないという考え方、宗教を信じていない等、マスコミによっていかにもこれが真実であるが如くに報道されているのが現状であります。

嘗てのように近隣の人を集め、喪主や親戚の意向を汲んだりする伝統的な部分が失われ、葬儀社や農協などに依存する社会情勢と成ってしまいました。地域の絆が薄れ、家族が葬儀を主催するのが主流となってしまうのが現状であります。

僧侶の努めは特に、葬儀を営むとき必ずそこに意（こころ）を添えていくことが大切であります。心のもった葬儀をするには、亡くなった人に戒名を付ける時においてもその人の性格、職業、年齢などを加味した、遺族が成るほどと思うような、又なぜこの字を使ったかを説明できる戒名を付けることを心がけることも一つの方法であります。（葬儀の流れの中で、導師が遺族の方々と参列者に説明していくことも一方法であるが、葬儀の流れを止めてしまう恐れがあるから注意が必要である。又、葬儀を始める前に差定を配布するのも一案である）

生前中の名前は他界するまでの名であり、戒名はその家が続く限り仏壇にて供養されるものでありますから、戒名を付けることの意味は重いものであるということに自覚しなければなりません。又葬儀の際に唱える香語にしても「儀礼的ではなく」、出来る限り今僧侶が何を言ってくれているのか、檀信徒に分かるように故人の生き様を語り、最後に人生を締めくくる一喝をして簡潔な一語で悟りの風光を述べます。まさに、この時こそ故人が仏と成った瞬間なのです。



特集 送る心

企画・取材／倉島隆行・長岡俊成・岡本真宰・宮入真道
レイアウト／西屋真司

参考資料／『そうせい』128号全曹青30周年事業～人々に解りやすい葬儀をめざして～(HP『般若』でご覧いただけます)



ZENSOUSEI 19th

レポート 全曹青

「情熱を注ぎ宗門の前衛で活動を」 平成24年度全国曹洞宗青年会定期総会



平 成24年5月25日、曹洞宗檀信徒会館に於いて「平成24年度・全国曹洞宗青年会定期総会」が開催されました。

第19期松岡広也会長が本尊上供の導師を務めた後、曹洞宗宗務庁・神野哲州財政部長より「私も皆さんと同じように青年会活動に情熱を注いだ。その情熱があるからこそ卒業しても受け継がれて行く。これからも宗門の前衛にて頑張って活動して欲しい」とのご祝辞を賜りました。

その後の議事では、23日からの執行部会・理事会を経て定期評議員会にて議決された、平成23年度の事業及び決算についての報告等が各担当者からあり、平成24年度事業計画についても総会にて承認されました。又、第20期会長選考では次期会長予定者として櫻井尚孝師（静岡第三同志会）が承認されました。報告事項として、東日本震災の復興支援活動や平成23年度

禅文化学林、特別委員会の設置について報告があり、先の評議員会で議決された『会費に関する規程の改正』については荒木道宗副会長より「平成25年度の会費徴収から改正後の会費（一人1000円）をお願いしたい」との説明がありました。



異なる視点から 復興支援事例を交換 ～クロスロード手法による 振り返りと自己の省察～ 中央研修会

中 央研修会では、特定非常
利活動法人新潟ボラン
ティアネットワーク事務局長・

李仁鉄氏をお招きし、「クロスロード（分岐の意。様々な事例についてYES・NOの選択をした上で意見交換をする手法）」を用い、東日本大震災等の事例に基づいた「避難所等でのもしも？の対応」「災害対応のジレンマ」について全体で意見が交わされました。この、意見が違う者同士が互いの視点や価値観を認め合い、新しい視点や気づきを得る事につながる「クロスロード」という手法により、参加者各自が、震災時の対応について、より自分の身に引き寄せて考えることができたようです。その後、グループに分かれ、災害・防災・災害ボランティア



活動等に関する事例について意見を交換。最後に、現地で実際に支援活動をされている宇根節氏や宮下俊哉全曹青災害復興支援部アドバイザー、久間泰弘顧問が所感を述べられ、参加者は真剣な表情で自分に照らし合わせながら聞き入っていました。長野県第二宗務所青年会より参加された百瀬師は「実際の事例を検討させていただき、大変勉強になりました。発災後、時間の経過とともに支援のあり方も変化してくると思います。現地のニーズに寄り添い、今必要とされる活動に取り組みで行きたい」と話されました。



去

る6月11日～16日、WFBY (The World Fellowship of Buddhist Youth・世界仏教徒青年連盟) 世界大会が韓国南部、麗水にて開催されました。様々なフォーラムが開かれるとともに、第63回常任理事会・第17回総会等の会議やWFBY設立40周年の祝賀会が行われました。

役員改選が行われた総会には、全曹青より全日仏青理事長・村山博雅特別委員長と同副理事長・松岡広也会長を始めとする計9名が参加しました。選挙の結果、村山委員長はWFBY副会長に就任いたしました。

東日本大震災に関する復興支

援活動を年間活動報告の一つとして発表した全日仏青が担う委員会はHumanitarian Committee。平成25年8月25日～29日にはCrisis Management IBYE Japanと題し、IBYE (国際青年仏教徒交換プログラム) を復興支援活動として行うことが決定しました。

全日仏青では、各加盟団体を始めとする日本の青年僧侶が、様々な方向から被災地に寄り添ってきた経験をふまえ、この度の災害に対する切なる思いを国際社会に発信し、改めて尊いのちや自然環境を考える機会を広く創出していききたいと考えています。

諸国の仏教徒が 十万人パレード 韓国の花まつり「燃燈會」

曹

洞宗務庁財政部長・神野哲州老師よりお話をいただき初めて参加させていた

だいた韓国の花まつり「燃燈會」は、根本的な文化・信仰心の違いをとても感じる事が出来た行事でした。曹溪寺様、奉恩寺様も色とりどりの提灯で飾られ、以前拝登させていただいた時とは趣が全く違っており、とても華やかで活気があるように感じました。セレモニーが行われ、パ

レードの出発地点であった東国大学での盛り上がりにも驚かされました。各国の仏教徒・国内の諸団体が参加していたおよそ十万人にも及ぶ参加者のあったパレードは圧巻でした。とても煌びやかで心に残るものでした。帰路につく際に我々もそのパレードの列に勝手に加わったのですが、何とも言えない高揚感を味わえました。

翌日開かれた曹溪寺様の門前の通りを封鎖しての各国・各諸団体のブースもそれぞれ特色があり、非常に興味深いものでした。全てが新鮮であり、感動した二日間でした。そして機会があれば是非ともまた参加したいと強く感じました。

(監事 櫻井尚孝)



全国曹洞宗青年会の活動は皆様の賛助費に支えられております。
この度ご協力いただき誠に有難うございました。

58 長福寺 様
122 石洞寺 様
158 願成寺 様
233 玉泉寺 様
247 正福寺 様
269 竜泉寺 様
290 長泉寺 様
295 東海寺 様

●宮城県

9 瑞雲寺 様
10 瀧澤寺 様
69 見松寺 様
113 繁昌院 様
176 泉永寺 様
252 福嚴寺 様
352 安永寺 様
461 洞松院 様
465 松岩寺 様

●山形県第 1

14 耕雲寺 様
88 智鏡寺 様
208 普門寺 様
232 広際院 様
243 珠徳寺 様
245 松林寺 様

●山形県第 2

285 泉高院 様
389 長泉寺 様
408 普濟寺 様
417 繁応院 様

●山形県第 3

468 宗伝寺 様
561 勝源寺 様
659 持地院 様
671 海禅寺 様
735 冷泉寺 様
742 龍澤寺 様

●秋田県

1 鱗勝院 様
26 洞泉寺 様
27 永源寺 様
79 東林寺 様
95 蔵昌寺 様
162 祥雲寺 様
174 満福寺 様
184 護昌寺 様
206 松雲寺 様
207 大川寺 様
212 雲仙寺 様
220 雲巖寺 様
260 松庵寺 様
265 倫勝寺 様
302 天昌寺 様
306 洞雲寺 様

313 立昌寺 様
321 鏡得寺 様

●新潟県第 1

341 雙善寺 様
344 玄德寺 様
358 円光寺 様
363 定明寺 様
368 正通寺 様
373 常福寺 様
407 長興寺 様
408 昌福寺 様
450 西福寺 様
454 林昌寺 様
475 天昌寺 様
496 長楽寺 様
503 竜源寺 様
728 妙喜寺 様

●新潟県第 2

681 総源寺 様

●新潟県第 3

546 清月寺 様
558 周広院 様
571 転輪寺 様

●新潟県第 4

9 東陽寺 様
53 英林寺 様
236 東岸寺 様
255 龍阜院 様
288 宝蔵寺 様
767 鉄相寺 様

●青森県

8 宝積院 様
17 普門院 様
74 浮木寺 様
79 法光寺 様
80 法円寺 様
84 涼雲院 様
98 東光寺 様
119 大安寺 様
158 見性寺 様

●石川県

79 東光寺 様
116 興禅寺 様

●長崎県第 2

125 松水寺 様

●長野県第 1

12 松巖寺 様
65 柳原寺 様
123 真蔵寺 様
300 威徳院 様
306 城光院 様

長野県第 2

374 三光寺 様
420 金松寺 様
424 東光寺 様
493 吉祥寺 様
541 観音寺 様
595 検校庵 様

●徳島県

17 江音寺 様

●富山県

54 大淵寺 様
83 永久寺 様

●福井県

12 金西寺 様
269 御誕生寺 様
291 福聚寺 様
297 満願寺 様

●福島県

10 佛母寺 様
44 玉泉寺 様
72 泉秀寺 様
99 茂林寺 様
101 成林寺 様
110 竜徳寺 様
226 常隆寺 様
230 大安寺 様
240 耕林寺 様
266 洞雲寺 様
275 性源寺 様
374 常德寺 様
449 松庵寺 様

●北海道県第 1

37 法徳寺 様
96 観音寺 様
254 北大寺 様
462 昭宥寺 様
468 養福寺 様

●北海道県第 2

181 永祥寺 様
239 禅昌寺 様
418 萬台寺 様
454 大禅寺 様

●北海道県第 3

203 西来寺 様
361 正林寺 様

ボランティア基金感謝録

平成 24 年 3 月 13 日～ 6 月 3 日取扱分

静岡県 石川悦子 様
福島県 吉田光希 様
福島県 吉田順子 様
千葉県 満蔵寺檀信徒 高橋信之 様
埼玉県 真言宗東養寺 高橋一晃 様
福島県 成林寺 様
島根県 宗淵寺 様
東京都 青松寺 様
新潟県 東岸寺 様
平成 23 年度布教師養成所所員一同 様
曹洞宗北海道青年会 様
曹洞宗福島県北青年会 様
(順不同)

平成 24 年度 総会祝賀一覧

山口県 福昌寺 様
愛知県 興正寺 様
埼玉県 東陽寺 様
山梨県 正覚寺 様
愛媛県 法華寺 様
島根県 海雲寺 様
静岡県 光明寺 様
愛知県 松秀寺 様
三重県 四天王寺 様
愛媛県 興雲寺 様
静岡県 長光寺 様
静岡県 栄林寺 様
三重県 光明寺 様
岩手県 長福寺 様
秋田県曹洞宗青年会 様
曹洞宗福島県青年会 様
愛知県第一曹洞宗青年会 様
京都曹洞宗青年会 様
曹洞宗岐阜県青年会 様
(順不同)

贊助費淨納御芳名簿

平成 24 年

3/14 ~ 5/31 取扱分



●東京都

3 俊朝寺 様
 17 竜沢寺 様
 90 梅岩寺 様
 105 鳳林寺 様
 119 泉竜寺 様
 160 喜運寺 様
 177 清巖寺 様
 278 高乗寺 様
 302 桂福寺 様
 371 円明寺 様
 406 全昌院 様

●神奈川県第 1

310 種徳寺 様

●神奈川県第 2

10 随流院 様
 81 貞昌院 様
 131 乗福寺 様
 171 常昌院 様
 394 長尾寺 様

●埼玉県第 1

92 浄山寺 様
 138 心鏡院 様
 190 廣徳院 様
 416 昌福寺 様
 420 東雲寺 様

●埼玉県第 2

213 泉福寺 様
 227 東陽寺 様
 331 曹源寺 様
 359 養昌寺 様
 368 東昌寺 様

●群馬県

82 長信寺 様
 144 雙松寺 様
 154 海蔵寺 様
 194 善宗寺 様
 338 龍松寺 様

●栃木県

1 成高寺 様
 4 林松寺 様
 26 宝光寺 様
 43 東光寺 様
 53 大中寺 様
 131 高德寺 様

●茨城県

38 蒼龍寺 様
 39 常安寺 様
 182 龍心寺 様

●千葉県

2 宗胤寺 様

7 満蔵寺 様
 12 高根寺 様
 24 仁守寺 様
 62 竜湖寺 様
 74 廣濟寺 様
 93 芳泰寺 様
 95 寶應寺 様
 119 森巖寺 様
 164 長久寺 様
 185 勢國寺 様
 198 太高寺 様
 212 真光寺 様
 243 最勝福寺 様

●山梨県

339 南明寺 様
 392 慈照寺 様
 482 慈眼院 様

●静岡県第 1

6 瑞龍寺 様
 61 長光寺 様
 77 龍泉院 様
 83 洞福寺 様
 95 久應院 様
 107 大正寺 様
 127 楞巖院 様
 164 興禅寺 様
 178 大泉寺 様
 180 秀源寺 様
 495 普門院 様
 511 慶福寺 様
 528 盤石寺 様

●静岡県第 2

291 明德寺 様
 329 永昌寺 様
 332 龍雲寺 様
 343 二養院 様

●静岡県第 3

608 養勝寺 様
 676 孤雲寺 様
 684 文殊寺 様
 791 春林院 様
 870 窓泉寺 様
 1208 法雲寺 様
 1228 栄林寺 様
 1273 東林寺 様

●静岡県第 4

1097 大聖寺 様

●愛知県第 1

7 全香寺 様
 28 長松院 様
 58 聚福院 様
 97 洗月院 様
 115 桃巖寺 様

131 天年寺 様
 148 法泉寺 様
 170 宝生寺 様
 173 神蔵寺 様
 208 日光寺 様
 261 薬師寺 様
 313 長松寺 様
 340 興禅寺 様
 342 常楽寺 様
 354 広濟寺 様
 625 宝積寺 様
 628 靈岩寺 様
 635 永澤寺 様
 675 妙昌寺 様
 1092 地蔵寺 様
 1118 観音寺 様
 1169 観音寺 様
 1241 観音寺 様

●愛知県第 2

684 花井寺 様
 686 観喜寺 様
 813 全久院 様
 852 光福寺 様
 892 醫王寺 様

●愛知県第 3

428 宝珠院 様
 484 興昌寺 様
 562 慈光院 様

●岐阜県

28 観音寺 様
 99 靈泉寺 様
 106 円通寺 様
 127 増福寺 様
 133 福寿寺 様
 167 正宗寺 様
 189 久昌寺 様
 190 長久寺 様
 237 瑞巖寺 様
 245 良守寺 様

●三重県第 1

24 一心院 様
 37 四天王寺 様
 39 庭岩寺 様
 40 宝泉寺 様
 114 海禅寺 様
 144 福源寺 様
 159 常足庵 様
 166 陽光寺 様
 225 玉泉院 様
 269 大蓮寺 様
 323 禅法寺 様

●三重県第 2

435 長全寺 様

●滋賀県

164 正傳寺 様

●京都府

67 苗秀寺 様
 70 護国寺 様
 73 春現寺 様
 236 善光寺 様
 389 萬福寺 様

●大阪府

68 陽松庵 様
 100 南詢寺 様
 109 法蔵寺 様

●兵庫県第 1

37 正林寺 様
 307 福林寺 様
 315 長松寺 様
 340 永春寺 様
 369 大龍寺 様
 439 誕生寺 様

●兵庫県第 2

115 慈眼寺 様
 117 法円寺 様
 134 谷松寺 様
 135 弘誓寺 様
 145 長源寺 様
 221 永源寺 様
 223 竜蔵寺 様
 225 大雲寺 様
 280 長源寺 様

●岡山県

3 長川寺 様
 5 景福寺 様
 28 洞松寺 様
 131 済渡寺 様

●広島県

1 国泰寺 様
 13 延命寺 様
 22 光禅寺 様
 34 吉祥寺 様
 46 双照院 様
 78 昌源寺 様
 106 信光寺 様
 146 福善寺 様
 160 千手寺 様
 177 功德寺 様
 179 神宮寺 様
 185 明福寺 様

●山口県

25 弘濟寺 様
 86 興元寺 様
 102 保福寺 様
 109 大楽寺 様

111 溪月院 様
 167 法田寺 様
 190 亨徳寺 様
 223 東光寺 様
 236 飯倉寺 様
 263 観音寺 様

●鳥取県

82 吉祥院 様
 114 安楽寺 様
 133 妙元寺 様
 159 大祥寺 様
 197 永福寺 様

●島根県第 1

209 円通寺 様
 231 岩龍寺 様
 330 正法寺 様

●島根県第 2

2 永昌寺 様
 18 萬松院 様
 19 常福寺 様
 32 宗淵寺 様
 59 清光院 様
 63 龍覚寺 様
 78 全隆寺 様

●愛媛県

18 陽春院 様
 111 大通寺 様
 146 興雲寺 様
 155 禅興寺 様

●福岡県

102 能満寺 様
 158 報恩寺 様

●大分県

82 多福院 様
 146 香林寺 様

●長崎県第 1

3 永昌寺 様
 8 円福寺 様
 23 智性院 様
 78 宝泉寺 様
 85 神護寺 様

●佐賀県

15 静元寺 様
 239 西林寺 様

●熊本県第 1

60 含蔵寺 様

●岩手県

13 長善寺 様
 49 廣澤寺 様

聴く禅

広報委員会委託委員 青野貴芳

第五回 傾聴とメタ認知(続)

先号において、「傾聴においてもメタ認知が重要な役割を果たしているのではないか」と仮説を提示するような書き方をしました。しかし、同号で「傾聴は話し手自身が気づきを得ることを目指す」とも書いています。そして、このことは、傾聴において一般的な了解事項であろうかと思えます。既述の通り、自身の認知内容に気づくことはメタ認知の働きなので、私が推量するまでもなく、傾聴においてメタ認知の重要性は、すでに当然のことなのかもしれないですね（従来、「メタ認知」という語によって説明されてはこなかったとは思いますが）。そのようなわけで、屋上屋を重ねることになるかもしれませんが、この点について以下に述べます。

いきなり私事で恐縮ですが、私の妻は声が大きいです。体はミニサイズですが、声はメガデシベル級。歌など歌わせると豊かな声量で聞き惚れてしまいます。ですが、四歳になるうちの娘を叱る声も、音量調節ツマミを右に3回転させているようにしか聞こえません。私も含め周囲の者が、折に触れてその点を注意するのですが、本人は「そんなに声大きいかなあ？」と、今ひとつピンときていない様子でした。

ある時、娘と遊んでいると、娘が「お母さんの真似して」と私に言いました。そこで、妻が娘を叱る様子を大げさに真似してみたところ、娘は大うけで、「もっとやってみて」とせがんできます。私も調子に乗って、さらにデフォルメの度合を強くして妻の真似を続けました。しばらくすると、妻がこちらにやってきました。洗濯物を畳みながら、こちらのやりとりを聞いていたのでしょうか。「私って、いつもそんなふうには叱っているのね」と、ちょっとしよげた様子です。しまった！ちょっと、やり過ぎたか。

でも、ハッとしました。おお、これって、まさに私を介して妻がメタ認知したということではないか！私が妻の様子を真似ることによって、妻は自分のあり方に気づいたのですから。それ以来、妻は、努めて穏やかな声で娘を叱ろうとするようになりました。なんだか不自然なのですが……（と思っていたら、いつの間にかまた大声で叱るようになっていました。開き直ったか）。ともかく、メタ認知力を再確認した次第です。ということでは本題へ。

1 カウンセリングの成功条件

またまたロジャーズに登場願います。彼のグループは、1957年から7年間に亘り、「ウィスコンシン・プロジェクト」と呼ばれる研究を行いました。その研究テーマは、カウンセリングが効力を持つ場合の条件についてです。つまり、カウンセリングの成否を分けるものは何かということですね。

いくつかの項目とカウンセリングの成否との関連性が調べられましたが、カウンセリングの成功と連関しているのは、クライエント側の「体験過程」

の項目だけであるという結論が導き出されました。これは、クライエントの「体験過程に触れる能力」が高ければ、カウンセリングも上手くいきやすいということを意味します（体験過程については後述します）。

これは、驚くべき結果であったのでしょうか。当然、研究前の予測では、カウンセリングの成功率はカウンセラーの技量の如何にかかっていると見込んでいたのだと思います（カウンセリング業界内部の人であれば、そうあって欲しい結論でもあるでしょう）。しかし、結果はというと、言うなれば、カウンセラーが上手であろうと下手であろうと、クライエント側の能力のみがカウンセリングの成否を左右するということです。ですから、「カウンセラーの存在

意義ってなに？」と言いたくなります。カウンセラーは、ただの置物か!? (カウンセリングの構造上、無くては困るのでしょうか……)。

まあ、この研究結果についても、様々な評価があるのだと思います。現在、ロジャーズの流派で、「体験過程」が看板となっているわけではありませんし。私も、傾聴の学習過程で、体験過程云々という話は聞いたおぼえがありません。ロジャーズ自身が、傾聴において重要だと考えたのは、カウンセラーとクライアントの「関係」でした。そして、その関係の質を保障するものが、カウンセラーの「受容」「共感」「純粋性」という態度条件になるわけですから(こちらは金看板です)。なぜ、上記の研究結果にも関わらず、「関係」を重視するのか興味深いところですが、ここでは追求いたしません。

2 体験過程について

ここで体験過程について説明します。体験過程とは、「自分の内側に確かにあるけれども、それが何を意味しているかは不明瞭な漠然とした感じ」のことをいいます(「フェルトセンス」とも呼ばれます)。たとえば、「うまく言葉にならないけど、なんとなくモヤモヤした」というような感じですか。

ウイソコンシン・プロジェクトに参加していたユージン・ジェンドリンに

よると、この体験過程が象徴化されることにより、人格に前向きの変化が生じるとされます。象徴化というのは、そのはっきりしない感じが、明確に言語化・イメージ化されるということだと思います。

そういえば、小さい子どもを見てみると、自分の気持ちを言葉で表現できなくて泣きわめくことがあります。子どもの気持ちを大人が上手く代弁してあげると落ち着くようです(子どもがパニック状態になってしまったら、もはや何をしても無駄ですが……。泣く子と地頭には何とやらですね)。

なるほど、大人でも子どもでも、自分にとって重要なことや気になることは、ちゃんと明確な言葉やイメージとして形にしてあげることが、心の安定に役立つようです。

しかし、体験過程の象徴化の例として、子どもの事例を挙げたのは不適切かもしれません。なぜなら、体験過程の象徴化とメタ認知を結び付けたいのですが、子どもはメタ認知機能が十分に発達していないからです(特に六歳以前)。

たとえば、よく「なぜ、そんなことをするの!」という叱り方を子どもにしてはいけないと言われますが、これもメタ認知が未発達であれば当然のことです。つまり、ある行動を表現するに至った過程に思いを巡らすような認知能力は、子どもには無いのですから、「なぜ、そんなことをするの!」と反省を求めるのは無茶な要求だということ

となりえます。また、自身の思考過程を検証する必要があるような複雑な学習は、子どもには不可能だということにもなりえます。早期教育もほどほどに、ですね。ついでですが、既述のように、メタ認知は坐禅においても重要な認知機能となるので、幼い子どもにも本格的な坐禅は無理だということも言えます。ということで、子どもが気持ちを表現するということは、体験過程の象徴化とは関係ないことなのかもしれません。

3 フォーカシングと傾聴の要点

さて、上記のジェンドリンは、より直接的に体験過程を扱うべく、フォーカシングとか体験過程療法と呼ばれる方法を開発しました。フォーカシングの詳細は知りませんが、カウンセラーがクライアントの話を傾聴する中で行われるようです。ただ、両者のやりとりが、体験過程を推進するという方針のもとで遂行されることになりました。

への注意集中は、仏教系の瞑想や坐禅でも中核的な作業だと言えるでしょう。瞑想とフォーカシングの類似性に関する評価は、瞑想をどのように定義するかによるのだと思います。

話を戻しますが、フォーカシングにおける体験過程の扱いは、観察的であり、強い注意集中が働いています。すなわち、フォーカシングは、極めてメタ認知的な特色が強い技法です。そして、フォーカシングは、その出自からしても、傾聴の要点を、より明確に意識化し、また操作的にしたものであると言つていいでしょう。したがって、傾聴においてもメタ認知が重要であると言っているのではないのでしょうか。

【参考文献】

- 諸富祥彦、「カール・ロジャーズ入門 自分が自分になるということ」
- コスモス・ライブラリー、2008
- 村瀬孝雄、村瀬嘉代子(編)、『ロジャーズ』日本評論社、2004
- ニール・フリードマン、『フォーカシングとともに①』
- コスモス・ライブラリー、2004



青野貴芳 (あおの きほう)
1970年静岡県生まれ。東京大学大学院満期退学。大本山永平寺、宝慶寺にて安居。現在、養雲寺副住職、中里保育園園長、愛知学院大学・富士市立看護専門学校非常勤講師、全曹青広報委員会委託委員。

05 Air Mail 海外ZEN通信

ヨーロッパ国際布教総監部庶務担当／釜田尚紀



ストラズブル禅道場（フランス）の朝の行持

Les Innombrables Dojo Zen Européens （数えることができないヨーロッパの禅道場）

ボンジュール！ただいま6月、ここパリではどんどんと日が長くなり、日の出は約6時、日没は約22時。待ちに待った夏の到来に、あちこちの公園では開放的な装いで日焼けにいそむパリっ子たちの姿が確認できます（小さな公園が混み混みのビーチ化している）。彼らの太陽に対する執着心にはいつも驚かされますが、日本人の僕には、夕食を終え、片付けも済んで、フーと一息をついても、まだ外が明るいつい！というのにはいつになってもなじめません。

さて、今回はヨーロッパの禅の特徴の一つである、「道場」という運営形態について注目してみたい。前回、国際禅協会（AZI）の運営形態の紹介で少し触れたように、住み込みで修行が可能ないわゆる僧堂的寺院も郊外に出ればいくつ也存在するが、およそ都市部においてメジャーなのはアパート内の一室などを改修し参禅者を受け入れている道場スタイルである。

ヨーロッパにそんな施設は一体いくつあるのか？たとえば曹洞宗。一口にその系統の道場といっても、日本で修行した外国人僧侶が帰郷し開いた道場、弟子丸師のAZIグループ、そこから分派した坐禅グループなどがあり、また、北米で活躍された前角博雄師のホワイトプラム、安谷白雲師の三宝教団、西嶋和夫師のドーゲンサンガなどの道場も各地に点在する。さらに曹洞宗以外では、日本の臨済宗、中国禅、韓国禅、台湾禅、ベトナム禅などの道場があり（数的にはこちらが圧倒的に多い）、それらの大小までをあわせるといったいくらになるのか……。これはちょっと把握しきれない数字だ。

そんななか、我々が実際に訪問し交流のある道場の数はほんの一握りでおよそ50カ所程度（現在、ヨーロッパで活動する曹洞宗教師資格者は30名超）。「Zen」という言葉はヨーロッパ社会にずいぶん浸透したが、宗派としての

「Soto Zen」はまだマイナーな存在だといえる。

僕自身数カ国にわたり、何カ所か曹洞宗の禅道場を視察させてもらった。自宅の部屋や地下倉庫を改修し10人くらい坐れる坐禅堂にした小さなところもあれば、アパートの何フロアかを所有し、4、50人坐れる坐禅堂兼法堂、さらに講義室、裁縫室なども設備された立派なところもある。一日の流れは、国それぞれの生活リズムやメンバーの出勤時間が考慮されており、熱心なところだと毎日、およそ朝7、8時といった時間に道場へ集まり暁天坐禅をする。そして朝課、ところによっては応量器展鉢で浄粥をいただき、出勤。そして夜、仕事を終え夕食を済ませたころ、8、9時あたりにまた集まって夜坐、勤行をして解散となる（道場では平日、早朝と夜だけの行持となるため、坐禅のあと勤行するところが多い）。土日や祝日は、初心者の方を受け入れるため昼間の坐禅会を設けたり、通りすがりの人が自由に道場を訪れるよう一般開放しているところもある。

初のヨーロッパ道場訪問時の大きな感動は、なんとといっても参禅者たちの姿勢の美しさとその集中力だった。水を打ったように静まり、一ミリでさえ体を動かすことがためられる、そんな雰囲気。日本の参禅会でも、これほど姿勢正しく結跏趺坐が組める参禅者が集まるところは少ないのではないだろうか（夜3炷坐る道場もある！）。しかしよくよく考えてみれば、まず彼らは年季が違うのだ。ほとんどの人が、もう5年、10年の単位で毎日坐っている。そして坐るモチベーションとしても、彼らがなぜ坐るのかといえば、長年坐り、そのうえで心と体で納得しているからこそ、かくも岩のようにどっしりと坐れる……。

さて今回は、そんな道場に集う人々にスポットをあててみたい。今回仮に「参禅者」という言葉を使ったけれど、実際彼らを参禅者と呼んでいいものか、難しい問題である。しばしお待ちあれ。アビアントー。



曹洞宗北海道青年会

第二十六回小樽大会開催

6

月22日、曹洞宗北海道青年会の会員相互の懇親を一層深めるため、北海道小樽市グランドパーク小樽にて、「第26回曹洞宗北海道青年会小樽大会」を開催致しました。当日は曇り空で気温も低い天候状況でしたが、開催地・小樽青年会は第一宗務所であり、札幌や函館も含んでいるため、人数も北海道内で一番多く、会員の方々の大会への熱い思いでとても活気のある様子でした。

午後0時30分から受付を行い、午後1時30分から開会式典、記念撮影。午後3時からは、俳優や気象予報士として多方面で御活躍されております石原良純氏を特別講師にお迎えして、「空を見よう」というテーマで記念講演を行っていただきました。メディアでの石原良純氏とはまたひと味違う一面も拝見することができ、来場された方々の身になる講演でありました。

午後5時からは定期総会を行い、ここでもいっつにも増して会員の方々の熱心な様子が見え、意義のある総会を行うことが出来ました。午後6時からは懇親会。初めて顔合わせをする会員や、長らく顔を合わせていなかった会員、他教区の会員の方々と終始笑いの絶えない様子でした。懇親会中は和太鼓の演奏や、サイエンスマジック、大道芸も会場を沸かせました。2年に一度の大変な行事であったと思いますが、各々が努力して大円成で終えることが出来、とても有意義な一日でありました。

九州曹洞宗青年会

第四十二回九州総会報告

梅

雨入りし、シトシトと雨が降る6月12日、宮崎県ホテルマリックスにて、九州管内より90名以上の参加者を迎えて、第42回九州曹洞宗青年会総会が開催されました。新執行部となつての初めての総会となりましたが、各参加者の協力もあり、無事円成することができました。特に今後の会の運営等について発言等があり、九州が一丸となつて会を盛り上げていこうとする雰囲気は会員一同非常にありがたいことだと感じ、さらなる連携を深めました。

総会後は、富田富士也氏を講師として招き、「せめぎあつて、折り合つて、お互いさまの還る家」開かれたお寺に願いをこめての題名での講演がありました。さすが宗門での活動も活発にされているだけあり、我々宗門の青年僧にとつては意義深い内容でありました。人と人が接することに対する感情、孤独、共感等、今の人間関係を考える上で今後非常にためになるものでした。特にコミュニケーションによる人間関係の孤独感についての内容は、我々僧侶としての役割の変化であり、今後の活動のヒントとなるものではなかったでしょうか。人と人が向かい合うことの大切さをあらためて認識させられるものでした。

最後に講師からの青年僧に対するエールをいただき、総会、講演が無事終了しました。





各管区加盟団体紹介

「東海管区」

●東海管区

東海管区曹洞宗青年会は、東海4県10宗務所で成り立っております。各県の青年会では、毎年の坐禅会、托鉢などの活動に加え、昨年の東日本大震災以来、様々な形でボランティア活動等にも参加させていただいております。僧侶として、なおかつ青年僧侶で無ければできない活動を模索しながら、これからも活動を続けていく所存であります。なにとぞ一層のご法愛のもと、ご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

東海管区理事 渡津恵正

●曹洞宗静岡県第一宗務所青年会

当会は平成5年に発足し現在会員87名で活動しております。現在ボランティア、教化研修、広報の専門委員会を中心に地域社会に密着しつつ青年宗侶としての活動を展開し、特に昨年から毎月被災地に赴き、傾聴ボランティア活動を続けて参りました。10月31日には東海管区青年会小大会を開催いたします。又、来年には当会20周年

を迎え、平成27年には東海管区青年会大会を開催予定です。今後も当会会員の全曹青・松岡広也会長を地元青年会が支え、会員一丸となって活動してまいります。

静岡県第一宗務所青年会会長 小川善広

●静岡県第二宗務所伊豆曹洞宗青年会

当会は静岡県伊豆半島の宗務所管内162か所に僧籍を有する50歳以下の僧侶による任意団体で、現在の会員数は50名余りと小さな団体です。発足当初はさらに会員数が少なかったため、全曹青に加入したのは会員数が増えてきた数年前のことです。現在、布教・法式の研修会を開催するほか、東日本大震災をきっかけに被災地支援活動を始めました。今後も地元・伊豆と被災地が向き合い、伝えあう活動をすすめてまいります。

伊豆曹洞宗青年会会長 橋本昇祐

●静岡第三同志会

静岡第三同志会は、昭和45年に発足し、現在会員数約170名にて活動しております。本会は、「僧侶としてのプライドを持ち切磋琢磨し、時代の要求に応えるべく各種事業、研修、寺院行事、地域伝道の協力等の布教活動を展開していく」という同じ志のもと、サマースクール、法式研修会、徒弟研修会、チャリティーバザー等を行っています。今後も、次代を担う子弟教育に重点を置き、精進努力・和合の力を発揮す

べく活動してまいります。

静岡第三同志会会長 太田元三

●静岡県第四宗務所青年会照自会

「自らを照らしみる」当会は、40年程前、曹洞宗僧侶として、自己の研鑽、修養と宗風の宣揚及び正法の興隆を図ることを目的として発足しました。法式研修(三仏忌等)、バザーなどの慈善活動、親睦会などを開催し、活動を続けています。昨年の東日本大震災により、私たちは改めて宗侶として「何が出来るのか?」「今何をすべきなのか?」を問い、現在出来ること、すべき事をみんなで話し合い、現地の情報を持たない私たちはSVVAを支援することにより、自らが出来ることを模索してきました。

地元新聞社に広告掲載等のご協力を頂き、地元企業や県内寺院、一般の皆様から資金や物資の提供を頂き、昨年3月には、軽トラックや乗用車、スクーター、食料品、調味料、衣料品、生活必需品などを現地へ届けました。3月～4月は現地ボランティア員として、当会員を数名派遣しました。4月～5月には、毎週月曜～金曜日、6週間にわたり、計2000食の炊き出しをし、6月から現在までは毎月一回、現地訪問をして行茶やボランティア活動に勤めています。昨年8月からはSVVA気仙沼事務所に現地ボランティア員として、当会員2名を派遣し、来年3月まで勤める予定です。

今後も現地訪問を続けると共に、御寺院、地元学生、檀信徒などの方々にも現

地訪問やボランティアの勧誘をして、支援活動をしてみたいです。これからの社会を照らしみて、自らを照らしみて、自己の研鑽と修養に勤め、活動してみたいです。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

静岡県第四宗務所青年会会長 鈴木敬祥

●愛知県第一曹洞宗青年会

当会は、約100名の会員によって構成されています。二祖三仏忌を始めとした法要研修等を通して会員同士の連携と親睦を深めると共に、布教化活動として一般向けに「花まつり」「禅の集い」を開催し、健全な社会の形成に寄与することを旨としています。発足より35年経ちますが、会員数の減少、諸行事参加者の固定化等の問題点も出て参りました。青年会の存在意義を考える時期が来ているのかも知れません。

愛知県第一曹洞宗青年会会長 押田清秀

●東三河曹洞宗青年会

当会は愛知県第二宗務所管内の40歳以下の青年宗侶により構成されており、現在会員数は約60名です。主な活動は、一般の方を対象にした参禅会。会員の研鑽、相互の連携、親睦を深めることを目的として行う各種研修会やレクリエーション。宗務所諸行事への協力。そして、今最も力を入れていく東日本大震災へのボランティア活動等です。また、来年度には当曹青担当の東海管区の大会が予定されており、一同力を

合わせて動き始めております。青年僧らしく真つ直ぐ、深刺とした活動を続けていきたいと考えております。

東三河曹洞宗青年会会長 彦坂文丈

●愛知県第三宗務所青年会

愛知県第三宗務所青年会は、昭和51年に発足し、今年4月より第19期の事務局が発足して37年目を迎え、現在53名の会員にて活動しています。当会は発足当時より、月一回の法式を中心とする研修会を重ね、その集大成として昭和63年に『新修叢林』『洞門行法』の2冊組の書籍が発刊され管内はもとより全国的なベストセラーとなりました。先輩諸老師の築き上げてきた伝統の恩恵を有難く頂戴し、まずは自ら研鑽し、その後先輩老師の講義、点検をしていただくスタイルで、いつ・どこで・誰がどんな配役についてもスムーズな法要が出来るよう研修を積んでいく所存でございます。

愛知県第三宗務所青年会会長 佐野玲胤

●曹洞宗岐阜県青年会

曹洞宗岐阜県青年会は、今年で36周年を迎え、現在会員数40余名で活動しています。曹洞宗発足以来の活動テーマである「大衆教化の接点を求めて」をスローガンに掲げ、「勝友」たる宗侶であることを求め活動しております。また、県内諸老師方が作成された『歎佛会法式本』や『大般若理趣文』、『受戒会差定帳』等を規範として、法式研

修にも力を注いでおります。

曹洞宗岐阜県青年会会長 大森俊道

●三重県曹洞宗青年会

三重県曹洞宗青年会は昭和40年に発足し、現在60名の会員により、緑陰禅のつどい・伝道車布教・月例研修会（三佛忌等）を中心に活動しています。また平成16年よりHPを開設し、青年会活動の情報を発信。更に多彩な教化を目的に、和太鼓集団「鼓司」を立ち上げ、情熱のこもった教化活動を展開しています。47年の歴史の中で昔から変わらず開催される事業、新しく始まった事業、共に三重県曹洞宗青年会会員の熱い想いによって起こされた活動です。しっかりと取り組み、青年僧侶の限らない可能性を追求していきたいと考えています。

三重県曹洞宗青年会会長 松田徹英

●三重県第二曹洞宗青年会

我々三重県曹洞宗第二青年会は東日本大震災の発災以来、物資の搬入、瓦礫撤去、炊き出しや行茶など様々な形で被災地支援をおこなってまいりました。その支援活動中には多くの被災された方々や同じ志を持つ団体、ボランティアの人々と出会いました。今後も「僧侶」と言う立場を忘れることなく、常に慈悲の心を持って「自利利他」の精神で「偶然の必然性」即ち「ご縁」を大切に、支援活動を続けてまいります。

三重県第二曹洞宗青年会 鬼頭宝徳

ひとりで悩まずにお話してみませんか？
電話相談の研修を終了した、お坊さんが対応させて頂きます。

火曜日 15:00~19:00
080-1546-7464
日曜日 22:00~24:00
080-1546-7464
080-1547-5646
※通話料はご負担ください。

観世ふおん

相談無料 匿名OK 秘密厳守

両大本山御用達
梅花流法具販売指定店

法衣・装束・荘厳・神仏具・贈答用記念品

株式会社 梅金商店

(全国曹洞宗法衣同業会会員)

〈本 社〉〒460-0011 名古屋市中区大須三丁目39番33号
(大須交差点東北側)
TEL(052)241-0901(代表) FAX(052)241-1904



広報委員会

■倉島隆行委員長



「全国曹洞宗青年会」というと、何か堅苦しく大げさなものと考えられやすい。「委員長」とか「役員」などと言つて、途端にものものしくなる。組織が大きくなるにつれての必然だが、その中でも私は、友情感を失わない広報委員会にしたいと思う。それぞれの地域で活動している青年僧侶同志が出会い、そして集团的に結び付くのが「全曹青」である。広報として、その魅力を存分に発信していきたい（ユーモアも忘れずに）。

■長岡俊成副委員長



第18期の中盤より全曹青に関わらせていただいている広報委員会ですが、

何よりの糧は多くの宗侶と出逢い、お話を聞き出すことができ、様々な現場に赴くことができること。そこで感じた感動や発見を、誌面を通してわかりやすくお伝えして参りたいと思います。

読者諸師には、facebookや広報委員を通して、是非感想やご要望などをお寄せくださることを、この場を借りてお願いするともに、一層のご支援・ご愛読をお願い申し上げます。

■山田俊哉副委員長



前期は執行部で「庶務」として、般若のリニューアルや皆さんのパソコンの悩み解決を担当させていただきました。2期目の今期は広報委員会です。文章は苦手ですが、多才な委員の皆さんに囲まれて成長させて頂いておられます。熱血漢委員長さんの革新的な方針のもと、全曹青に新しいネットの風を生み出せる様に頑張ります。

■岡本真幸委員



この全曹青の活動を通してたくさんの方に出会いました。その出会

いの中には一期一会となったものもありましたが、各々がそれぞれの活動を全力でされていることを、連絡は取れなくても確信しています。その好敵手を前にしたような感覚が、自らのモチベーションの向上になっています。今日もホームページ般若へのたくさんアクセスをありがとうございます。「困ったときに頼れるサイト」私の目標です。

■宮入真道委員



全国曹洞宗青年会広報委員の任をいただいて早や一年と数カ月。思えば引継ぎを受けて以来、宗報の『SOURCE 1号外』締切との戦いでした。ページの中に如何に情報を収めるか？他の方の原稿の掲載、自分で一から書いた文章の掲載。そして文字数超過で再校正（泣）。一ヶ月毎にワード画面と格闘しながら、良い修行をさせていただいております。

■細川哲心委員



全曹青広報委員の任をいただき、早くも一年半が過ぎました。全国各地から集

鑽できる機会をいただいたことに感謝申し上げます。我が身の不勉強未熟ぶりを露呈しながらではございますが、何よりも広報という場所ので活潑地たる法友に練磨いただき、共に励みたいと思います。

■西古孝志委員



第一回目の『青年僧がいく！』で紹介していたいただきました、いずも曹洞宗青年会の西古です。出逢いのはしまりは点と点、それが結びついて一本の線となる。そして線が関係の中で縦横無尽に広がることによって、出逢いの中に様々な可能性が生まれることでしょう。広報活動を通して、自分にとってもまた皆さんにとってもより良い可能性が生まれるよう、日々努力していきたいと思っております。

■土田真輔委員



曹洞宗福島県青年会より参加しております。第18期執行部庶務に引き続き、今期広報委員を務めさせていただいております。編集作業に携わるのは初めてで、一つの冊子が出るまでの取材、原稿作成、レイアウト、校正など、勉強になることばかり

です。全曹青の「今」を分かり易く皆さんにお届けできればと思っております。これからも、微力ながら精進してまいります。どうぞよろしく願いたします。

■紫安敬道委員



第18期に引き続き第19期と広報委員として参加しています。「全曹青」に参加して、色々な方との縁を結べたことは非常にありがたいことです。各号の企画、編集、発刊という流れになかなか頭の回転が追いついていないことは事実ですが、残された任期をできる範囲で協力していきたいらと考えております。あと少し、委員長がんばって！

■万年守玄委員



地元の青年会に入つて間もない頃、当時の会長の全曹青の広報をやってみないかと誘っていただきました。始めは右も左も分からず言われるがままに動いておりましたが、二年目から何となくですが分かり始めてきたと思えます。まだまだ諸先輩方の足をひっぱっておりますが、一歩一歩精進して行きたいと思えます。

写真館
SOUSEI



「喜心」 撮影／市堀 玉宗師

遺されしこの世に夏花摘む做ひ 玉宗

【撮影地 / 石川県輪島市】

【写真の募集要項】全曹青広報委員会では、皆様からの写真作品を募集しております。詳しくは下記のメールアドレスまでお問い合わせください。
photo@sousei.gr.jp 次回テーマは「老心（ろうしん）」です。

■表紙の話 「お盆参り」

「お盆さま来年のお盆も待つてるからね」その一言が有り難かった…。時代が変わっても、言葉のぬくもりや、大切な人への想いは変わりません。今回はその想いを受けて、今を全力疾走する青年僧侶の姿を表紙としました。

撮影／日山賢吾 デザイン／広瀬知哲



編集後記

東日本大震災物故者追悼一周忌法要も厳修されてから夏至に入り、愈々処暑に向かおうとしております。広く全国に活躍する青年僧の活動を広報誌『SOUSEI』を通して伝えて行く…。倉島委員長の「宗侶だけでなく誰でも手にとって身近に感じてもらえる…、それが布教に繋がる」という言葉に、やりがいのある任をいただいたことに感謝しております。

会議、取材、原稿執筆そして校正と各委員の思いが誌面に反映される（締切に追われながら……）独特の緊張感で広報委員が全国の各会員とつながる。ついで祖山傘松会を思い出すような日が再び来るとは思いませんでした。

校正では毎号300件を越える『SOUSEI』賛助費浄納御芳名簿を眺めておりますと、全国の有志篤志の皆様がこんなにもいらつしゃって全曹青を応援して頂けると思い心が引き締まります。表紙から始まり裏表紙まで思いの詰まった『SOUSEI』。是非とも御法友様、お檀家様に誌面を手にとってご覧いただき、活躍する全曹青を賛同いただき賛助の輪が広がることを願いやみません。

（広報委員 細川哲心）

お詫びと訂正

157号にて、埼玉県第二宗務所青年会会長名を今泉至成師とさせていただきますが、正しくは「伊藤隆慶師」でした。訂正し、お詫び申し上げます。

守り伝えられし大切な伽藍、
私どもの技と経験がお役に立てれば幸いです。

社寺建築のカナメ

新築・改修・屋根工事・耐震



http://www.caname-jisha.jp

■本社 栃木県宇都宮市平出工業団地38-52 電話：028-663-6300
■名古屋支店 愛知県一宮市森本4-15-23 電話：0586-71-2882
■岡山営業所 岡山県岡山市北区今8丁目13-13 電話：086-245-2541

各会からの報告とお知らせ

■災害復興支援現地本部(福島県伊達市)

クレーンで本部床下土壌を除染

災 害復興支援現地本部では、6月19日から20日にかけて、現地本部敷地内の除染作業を行いました。大阪曹青から5名、全曹青執行部から4名の方々が活動に参加され、台風接近中の悪天候の中で作業を実施し、なんとか全日程を消化することができました。

復興支援活動の拠点となる全曹青災害復興支援現地本部では除染が完了し、除染後の放射線量率が減少しました。今後の数値変化は推測出来ませんが、少なくとも長時間プレハブに滞在し、作業するスタッフにとって測定数値の減少は喜ばしい事です。とは言え、床下を除染するだけでもこれだけの労力が掛かる現状ですので、いまだ楽観視は出来ないのが実情です。

震災から一年以上が経過し、現地で支援活動をしている同法も人手不足に悩んでいます。行茶や除染ボランティア活動の拠点となる支援部に参じていただき、自らの目で被災地の「今」を正視し、それぞれの出来る支援活動に取り組んでいただきたいと切に願います。



■総合企画委員会

若年世代にも「写経のススメ」



駒 澤大学付属苫小牧高校様にて、全曹青オリジナル「写経用紙」「写経用下敷き」を使って写経を体験していただきました。付属の「写経のころえ」を見ながら合掌してもらい、「四弘誓願文」を唱えたあと、「何かを願って写経してもいいですよ」と具体例をいくつか説明すると、願い事が沢山ありすぎるのか、書き始めるまで少し悩んでしまった生徒さんもいました。

手本が透けやすい白地の下敷きの上に、裏側に反転させて印刷した写経用紙を載せると「手本を横に置いて書くよりも書きやすい」「なぞる文字がとても見やすく書きやすい」という声も聞こえ、この写経用紙の良さを体感してもらえた様子。今回はそれぞれ筆ペンとボールペンを使用してもらいましたが、ボールペンで書いても、用紙が筆圧で破れることはありませんでした。生徒さんはとてもスムーズに、集中して一字一字丁寧に書いていて、書き終えた顔を見ると、始める前よりやや凛々しくなったような気がしました。

不安の多い現代社会の中において、幅広い年齢の方の心に安らぎを与えることのできる写経。皆さんのお寺や地域でも始めてみませんか？ 全曹青では、写経を始めたいという方に「写経用下敷き」を期間限定でお貸しします。お問い合わせはFAX03-6203-8682またはE-MAIL: shop@sousei.gr.jpまで。写経用紙のご注文は同封のチラシをご覧ください。